

..時・評..

高山 靖子



地域の技術的資源の活用

多様なデザイナーと共創を

毎年10月から11月、東京はデザインのショーケースと化す。海外では「デザインウィーク」として知られるこの催事は、イタリアのミラノサローネに代表されるトレードショーの影響を受けており、製品、建築、アート、社会的なコンセプトなど、さまざまなデザインが集結する場となる。完成品のみならず、普段目に触れることのない素材や加工技術を取り入れた社会課題へのチャレンジを通して世のトレンドを俯瞰する絶好の機会となるため、毎年楽しみにしている。

近年は、SDGs達成に向けた取り組みとして、廃材を混合し再生した樹脂素材を活用する製品提案が多く見られた。その取り組み自体の重要性は評価しながらも、デザイン提案としての新規性という点では少々物足りなさを感じ始めていた。しかし、今年は、素材固有の風合いや表情を生かし、表面処理の審美性を高める可能性を探究するところにまで踏み込んだ展示の多さ

が目をつけた。加工技術やその手間に着目し、ものづくりの裏側にある物語を伝えようとする展示も増えた。SDGsに関わるデザインの焦点は「情緒的な価値の深化」という次のフェーズに移ったようだ。

表舞台は東京でも、こうした高度な加工技術の現場の多くは地方にある。静岡県内からの出展は従来、木工家具に限られている印象だったが、2022年の展示では、若きデザイナーが県内の金型・樹脂加工会社の卓越した技術を生かした挑戦的展示を行い、渋谷区表参道で光を放った。

自動車産業を中心に、世界に誇る加工技術を持つ県内中小企業のポテンシャルは非常に高い。グローバル企業の本社が集まる県西部は地方都市ではトップクラスの企業内デザイナー数を誇り、こうした土壌の上にリモートで働

くフリーデザイナーや企業を退職したばかりのベテランデザイナーなど、多様な働き方の中で多くの潜在的デザイナーがいる。しかし、その存在は技術を持つ中小企業側に知られていないのが現状ではないか。逆に、デザイナー側に伝わっていないものづくりの技術も多々ある。

県内では、すでにデザイナーと中小企業を結ぶマッチング事業が実施されているが、この多様なデザイン人材との共創をもっと加速させることができれば、県内企業の新たな価値創出につながるのではないだろうか。地域に眠る人的資源と技術的財産が、柔軟で多層的な挑戦が生まれるマッチングによって結ばれ、「ものづくり」が「ものがたり」を生み出す未来に期待したい。

(静岡文化芸術大デザイン学部教授)

たかやま・やすこ 1966年、愛知県生まれ。同県立芸術大美術学部卒。東芝デザインセンター、同大非常勤講師などを経て2007年に静岡文化芸術大着任、15年から現職。専門はプロダクトデザイン、デザインマネジメント。芸術工学博士。